

2) 琵琶湖および河川の水生物の生息状況調査で得られた若干の知見

井出充彦

【背景・ねらい】1994年度の当該調査では、河川中下流と内湖及び琵琶湖沖合の調査を担当したが、その中で得られた若干の特徴的な知見について述べる。

【成果の内容・特徴】1. 河川中下流について(エレクトリック・ショッカーを使用)

①野洲川：冬期調査の中流域に設定した地点において、今回の河川調査で最も多くの魚種が採捕された。本流とそれに通じたやや流れのある溜まり水でズガゴイやトモロといった滋賀県では生息場所の限られた魚種を始め、サヤマ、リタゴ、ギギ、ソモロなど18種類(7種類を1種と計数)が採捕された。溜まり水では17種類と多く、本流では10種類となっている。なお、溜まり水中の護岸ブロックの隙間で特に多くの種類が採捕され個体数も多かった。それと比較して、下流域に設定した地点(溜まり水なし)では9種と少なく、近年琵琶湖で生息の確認されたマチバが含まれていた。採捕個体数もヨシボリ以外は比較的少なかった。また、護岸ブロックの隙間で採捕される魚類のほとんどが材竹バスであった。この時採捕された13尾の材竹バスの胃内容物を調べたところ、6尾が空胃で3尾がズゴイを4尾がヨシボリを1尾ずつ捕食していた。下流域が同じ河川でありながら採捕個体数の少ない原因は、溜まり水がないことと材竹バスの侵入が関係していることが考えられる。

②安曇川：夏期調査の下流域に設定した地点の濁水でできた溜まり水と、冬季調査の中流域に設定した地点の本流に接した溜まり水でトモロが採捕された。従来安曇川ではトモロの採捕記録はなかったが、最近の滋賀県立琵琶湖文化館の調査によって中流域で合流する一支流で採捕され新分布地として記録されており(前畑ら, 1994)、広く安曇川中下流域一帯に分布しているものと思われる。

2. 内湖の魚類相について(小型定置網を使用)

今回の夏期調査では5湖沼を調査対象とした。その結果31種の魚類及び甲殻類が採捕されたが、各湖沼で魚類相に大きな違いがみられた(図1)。この原因は環境差によるものと思われるが詳細は不明である。

3. 琵琶湖沖合について(漁船による沖曳網を使用)

1994年11月21日長浜沖でカサギが52尾採捕された。また、漁獲状況などから琵琶湖内で再生産していることが示唆された(別項参照)。

【成果の活用面・留意点】河川中下流の調査では、淀川におけるわんどと同様、本流に通じた溜まり水等、流れの緩やかな水域の有無が魚類相に大きな影響を与えているものと思われる。今後水域の環境変化の指標とするため、今回の調査で判明した各水域の魚類相が今後どのように変化していくか長期的に追跡していく必要があるものと思われる。

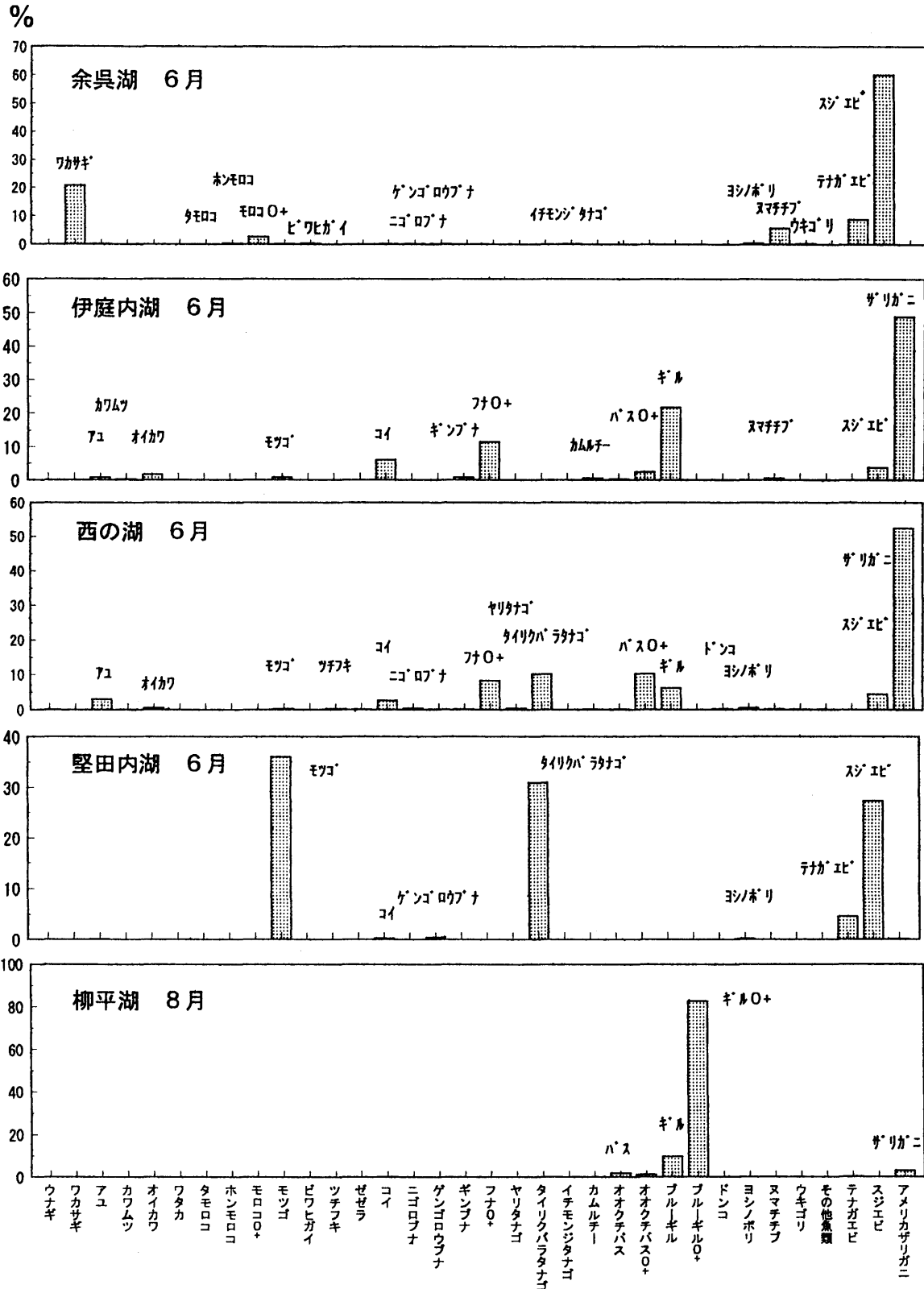


図1 内湖における採集魚類の個体数頻度.